

## 經濟時評及商況

### ◎最近工業思潮の二傾向 小島精一

#### (一) 企業組織の集中的發達

筆者の考ふる處では、世界大戦争以後産業界には次の三個の顯著なる傾向があると言へる。

第一は組織的、集合的傾向である。工業會社間の財政的協働即ち企業の合同や聯合や利益共同やの多數の實例が其主要なる顯はれである。之れは戦時中に巨富を蓄積した者が戦後の不況期に入つて劣等な會社を合併したり、戦後の激烈な競争に優勝するために相互に合同して能率の向上を計つたためである。鐵工業は戦時中何國でも殊更需要が膨脹し、從て生産設備が増大したのであるから、平時經濟への轉換に伴ふて勢ひ右の現象が著しかつた。米國の實例は前號に説明したが英國では政府の任命した特別調査會が從來の個人主義的の見地を捨て、協同一致の經營法に移らねばならぬと報告した程で、合同の實例は屢々傳へられて居る。例へば彼のドイツカアス會社の如きはウエスチングハウスを合併して、今日では十餘萬人の職工を使用して居る。又ウワキングトン鐵鋼會社を中心として數會社が團結して合同製鋼會社 (United Steel Co.) を組織した如きは其主なる一例に過ぎない。其詳しい事情に就ては他日調査を遂げて報道し度いと思つて居る。

獨逸の實例に就ては既に本誌上で最近に今泉博士が有益な報道をされて居る。筆者も嘗て (大正十年六月號) 稍詳しく

報告を寄せた事がある。合同の多くの實例中異彩を放てるは彼のフリーゴ、スチムネスを中心とするシイメンズ、ライン、エルベ、シユカート、ユニオン團である。又從來の鐵、鋼兩組合を打つて一團とし、全國の各種鐵鋼會社を組合員とする強制的カルテル式の組織が出来た事も注目すべき現象である。同國では社會化の問題が甚だ具體的となつたので、有力な企業家は其工場の買収さるゝのを恐れて、其豫防策として、頻りに大會社の集合が行はれたとも傳へられて居る。

協働的組織は單に生産設備や國內の販賣機關に就てに止まらず、外國貿易の振興上にも強く慾通されて居る。獨逸には一九一八年に半官的輸出貿易會社が出来英國には同じく全英産業聯合會が出来、米國にても聯邦商業委員が輸出貿易促進のためにはカルテルの有効なるを主張した結果同年四月にウエツ法が發布されて、輸出貿易に従事する場合に限り、組合を許す事になつた。之は同國に二十五年間實施され來つた排トラスト法に對する重要な例外である。一九二〇年にユー、エス會社以外の主なる大鐵鋼會社が聯合して共同的貿易會社を組織したのは此法制上の變更の結果である。ざつと右の通りで各國共企業の規模が大となつたのは言ふ迄もないが各種の協働的集合的組織が盛に歡迎されて居る。

#### (二) 民主的思潮の擡頭

次に最近の顯著なる第二の現象としては民主的思潮の擡頭を擧げねばならぬ。此勢ひは單に一般勞働條件の改善運動より進んで産業の管理運動に迄及んだ。工場委員制度利潤分配制度は先進國では概して例外なく行はれて居る。伊太利や佛蘭西に於ける企業管理參加の實例や、英國のホイットレイ委員會組織や進んで獨逸に於ける或種重要産業 (鐵工業、石炭

業、電氣工業、加里工業等)の社會化的管理等の實例は労働者階級の實力が資本主義の最後の牙城に迄迫り來つた事を切實に語るものである。米國には社會主義がないと言はれたのはもう二十年も前の夢である。同國の鐵鋼業は全世界で一番繁榮し、且つ資本家の協働的大團結が最も鞏固な産業である。其の頭首なるゲーリイ氏は最も完全な温情主義の實行者で、其他どの會社でも概して景氣がよいから色々な労働者に對する施設をやつて居る。此の巨城にも民主的の波濤が押し寄せて來た。一九一九年から二〇年に亘つて大規模に行はれた労働組合期成の罷業は幸か不幸か失敗に終つたが何時此次の激浪がやつて來るかも知れぬ。戦争は一方に少數の企業者の手に巨額の富と事業とを集中せしむると同時に其富の支配權に對して于渉する社會力を擡頭せしめた。

### (三) 科學と工業との融合

第三の傾向は科學と工業との融合である。是れは今更ら始まつた事ではない。獨逸の産業が勃興したのは全く科學的研究が充分産業界に浸透した結果だと言はれる。鐵工業にても最近に英國邊りで問題とされる燃料經濟組織の問題の如きは既に二、三十年前より解決されて居る。米國に始まつて各國に宣傳される科學的管理の主張も亦同一趣旨の思想である。製品の標準化(合理的標準規格制定)の問題もさうである。英國の鐵工業は最も舊き傳説を誇つて居るだけ、作業方法等も随分非科學的だと言ふ非難がある。然し戦争中の經驗が強く科學的研究の必要を感ぜしめたので、最近では舊設備を破壊したり、研究所を建設したり、標準規格を制定したり、著しく獨、米の長所を採用するに努めて居るさうである。工業教育の改善が亦熱心に論議されて居る。教養ある立派な技術家が中心となつて働かねば衰退に傾いた工業を支持する事

は出來ないと言ふ主張が屢々聞かれる様である。獨逸に於ては工業労働者四十人に就き一人の工學士が指揮して居るが、英國ではやつと五百人に一人の割合だと言ふから無理もないと思ふ。英國産業の不振を關稅制度や金融組織に歸して論ずる人もあるが、それは本末を逆にした議論である。關稅も投資等の行はれる場合には正當な防衛手段として必要ではあるが、夫れは謂はゞ「繁榮」の容器であつて、内容ではない。金融上の援助も大切ではあるが、先づ企業の成功する見込みが出來た上でなくては徹底的な融金が出來るものではない。獨逸の大銀行と工業の關係に就ても畢竟工業家が先づ科學的經營によつて、成功し得る可能性を示したからこそ資金の融通も徹底的に行つて失敗しなかつたのである。要するに産業繁榮の主幹的要素は科學思想の普及なのである。此考へが今、先進國の新しき競争原理として研究されて居る。然し他の多くの場合と同じく此問題も現今の制度では大企業の發達を俟たねば解決出來ない否孤立的對立より協働的組織への進展傾向其者が又科學的思想の要求なのである。

### (四) 本邦鐵工業の急務

以上最近の先進國の傾向を傳へた序に頭を回らして本邦鐵工業の現情を一瞥して見様か轉た寒心に堪へざるは筆者のみではあるまい。科學的經營の研究は沈滞卑屈の空氣の壓迫の下に全く捨て、顧みられない。合同談さへ個人的打算の狹隘なる障壁に妨げられて既に逡巡數十年を経たが一向進展せる模様もない。偶々未曾有の大震災に遇ふも其復舊材料は低廉なる外國品の輸入に俟たねばならぬ有様である。何にが故に企業心はかくも萎靡して振はないのであるか。自然の罪か人の罪か。改めて筆者は此愚問を敢て提出せざるを得ぬを悲しむ。

(以上三月十八日稿)



